



21世紀も四半世紀になる年です。“昭和”で数えると100年目でもあり、これに因んだ取り組みもあちらこちらで計画されているようです。単に区切りのよい年回りということではなく、世の中の動きに関心を持ちながら地域の歴史を観ていくことが出来たらと考えています。



(不動橋付近)

## 再開しました 大間野町旧中村家住宅

国の登録有形文化財(建造物)に指定されている大間野町旧中村家住宅は、傷んでいる個所の修復のために昨年度後半には一時的に休館していましたが、先月から見学再開をしています。そこで改めてこの住宅のご紹介をさせて頂こうと思います。



明治27年(1894年)建造。水害に備え、床は主屋よりも約1mほど高い。



奥多摩の御嶽神社から勧進して、覆い屋と共に大正前期に建造された。精緻な様々な彫刻が配されている。



明治19年(1886年)建造。中央に大扉と潜り戸がある。扉の東側には守衛部屋と農具部屋、西側には「前蔵」がある。外壁は松煙墨と漆喰を混ぜた鼠漆喰。

### 中村家の出自・由緒

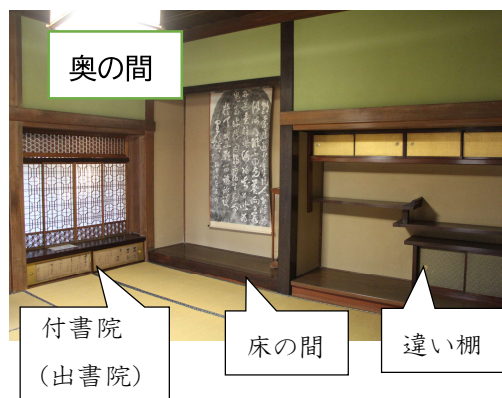
- \* 家伝によれば戦国大名・小西行長の家臣。関ヶ原合戦後、一族で当地に移り、周囲を開墾。農民となる。
- \* 江戸時代には大間野村の名主を務める。
- \* 近代の当主は副区長や県議会議員、村議会議員、市議会議員などを務めた。



房州石を組み上げた昭和前期の建築。米蔵として使用。内部の壁には等間隔に板を立て、米俵が石壁に直接接しないような工夫が施されている。

# 接客空間と居住空間

古民家の中でもかつて名主などを務めた住宅には、接客空間と居住空間があります。(前ページの間取り図中、赤□と青□の部分) 近世(江戸期)の名主は幕藩体制に於ける行政の末端でしたので、時には領主の家臣(武士)が訪問することもあり、その際には右のような接客空間が使われました。当住宅主屋は大正初期の建造なので、近世の様式を残しつつ当主の部屋や重要な来客用として使われたようです。



居住空間には寝間(納戸と言うこともある)や広間と板敷の間(茶の間)、土間がありました。家族の寝食や近所の人々との交流などに使われました。

土間には三つの役割がありました。普段の出入口、台所、作業場です。そのため床は「粘土(小砂利や砂も含む)」と「にがり」、「石灰」を混ぜて十分に捏ね、分厚い板でたたいて仕上げました。「三和土」と言います。土間には竈や囲炉裏を設えるので、天井を張りません。丸太材のままの梁は、煙で燻されて黒光りしています。煙から出る煤は雨漏りや害虫から屋根を守る効果がありました。

## 「どうして旧中村家を残しているの？」

平成31年(2019年)1月のことでした。社会科見学で訪れた大沢小学校3年生の質問です。歴史を学び文化財を保存する原点・本質を問われた気がしました。こういう仕事に携わる者として、生涯学習課ではこの問いをいつも念頭に置かなければならないと思っています。

このような古民家を観察していると、その建築思想と技術、そこで営まれた生活、さらには当時の社会全体(政治や経済、気候、風土、文化 等)を学ぶことが出来ます。そしてそれらは“現代はどういう時代、社会なのか”、“これからどういう世の中になっていくのか”という問いに繋がってきます。

またこのことは、“人としてどう生きていったらいいか”、“自己実現のためだけの勉強でいいのか”という人生観にも関わるかもしれません。小学3年生と古民家からとても大切なことを教わっています。

これから好い気候になります。「大間野町旧中村家住宅」や「旧東方村中村家住宅」(レイクタウン)に、是非とも足をお運びください。



### 主屋の外観

二階建てのように見えますが、そうではありません。敷地の北西には屋敷林があります。

大間野町旧中村家住宅石蔵には近世以降の市域の歴史を概観できるパネル展示が常設されています。旧東方村中村家住宅では市域の発掘資料もご覧いただけます。

- ・大間野町旧中村家住宅
- ・旧東方村中村家住宅

〒343-0844 埼玉県越谷市大間野町1-100-4  
〒343-0828 埼玉県越谷市レイクタウン9-51

☎048-985-9750  
☎048-986-7051

【開館時間】 9:00～17:00(入館は16:30まで) 【入館料】 一般100円、小・中学生50円、未就学児無料  
【休館日】 大間野町:月曜日、旧東方村:水曜日 いずれも休館日が祝日の場合は直後の平日休館、12/29～1/3